

海部宣男氏ロングインタビュー

第12回：日本学術会議とマスタープラン



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

インタビュー協力：小久保英一郎（国立天文台）

海部宣男氏インタビューの第12回です。野辺山45 m電波望遠鏡、すばる望遠鏡、ALMAと天文学の様々な大型観測装置に携わってきた海部氏ですが、晩年は日本学術会議の会員として日本の学術全体の大型計画を推進する制度設計に取り組みました。その結果立ち上げられたのが日本学術会議マスタープランで、大型計画に馴染みの深い天文学は1つのモデルケースとなりました。これにより学術の大型計画をめぐるプロセスの透明性や公平性が担保され、より健全で効果的な学術行政への重要な一歩となったのです。

●マスタープラン策定の背景

高橋：海部さんは2005年から2011年まで日本学術会議の会員でしたね。そこで学術の大型計画に関するマスタープランと文科省のロードマップ作りに関わったというふうに聞いております。天文学でも大型将来計画をマスタープランに出すということで盛んに議論されていて、若手の研究者も含めコミュニティ全体に大いに影響しているわけですが、今回はこのマスタープランとロードマップについて詳しく聞きたいと思います。まずは、そういうものを作る背景についてお話ししていただけますか？

海部：日本学術会議のマスタープランというのは2つポイントがある。1つが学術、基礎科学分野の大型計画を進める上での透明性の問題があったわけです。まあ予算がないっていうのは文科省側の問題ですから、学術の側としては透明性の問題がある。つまりだれがどう（大型計画を）提案して、どうやって通っていくのかっていうことはまあ外から見ると全く分からない。これは甚だ

よろしくなくてですね、そういうふうな状態にあると、早い話、政治家が出てきちゃうんだよ。「あれを通してやったらどうか」とか、そういう話にどうしてもなる。

実はすばるでそういうことがあった。要するに、古在（由秀）さんの知らない間に政治家に運動したり、文部省に会いに行ったりするということがあったんだよ。そうなる何が起きるかっていうと、文部省は怒って古在さんに文句言いにくるわけですよ。「一体天文台は統率が取れてるんですか」って。文部省にしてみればそういうのが一番困るんだから。政治家に言われるのはもう最も嫌いなことだよ。なぜかっていうと、皆さん文部省は政治家とつるんでると思ってるかもしれないけどそうじゃない。文部省は政治家にあれしろこれしろ、あれ作れこれ作れて言われるのが一番嫌なんだよ。だってそうしたら無理難題が来るに決まってるんだ。そうでしょう？ そうしたら研究者に対して顔向けができないじゃないですか。文科省はやっぱり大学や研究者を相手に仕事をしてるっていうのはよく分かってて、まあ皆さ

ん文句あるでしょうが、日本の省庁の中では文科省が一番よく分かってるんだ。分かってないと思うでしょう。分かってないと思うこともあるが、ものすごくよくがんばってるっていうのも事実で、それはもう財務省の圧力に必死で対抗してる弱い省なんですわね。

だからそういうところへ勝手に研究者の一団が行って、例えば地元の利権と絡んでるような、誘致したい地元の有力議員の所へ持って行くと、その有力議員は文科省に行って、「何でやらないんだ」と。それが一番困るんですよ。だから僕は今、大型計画で最も警戒してるのはそれだよ。

高橋:なるほど、そういうのがあると有力な政治家にコネがあるとか、そういうもので大型計画が決まってしまうわけですね。

海部:だからやっぱりそういうものはボトムアップでなきゃいけない。学術の側で考え準備し、学術の側で評価したものが提案されていくという。それをそのまま通せとは僕は言わない。でも提案したものの中から通っていくと。そういうプロセスを明確にするにはね、やはり学術コミュニティの代表である日本学術会議がそういうものを募集し、審査し、公表するというのが必要で、そういうのをやるというのが学術会議のマスタープランの1つのポイントですね。

高橋:それが透明性ということなんですね。

海部:もう1つのポイントは、今までの大型計画では分野が偏ってた。物理の加速器、天文の望遠鏡。まあ望遠鏡はだいたい加速器に比べると後からやって来たものですね。それから核融合とか放射光とかね。そういう物理・天文関係の分野でばかり大型計画が通っていたわけです。それは理由があって、やっぱり大きい望遠鏡とか加速器とかがなきゃやれないんだから、それは必要なんだ。だからそういうところでは議論が盛んになり、ボトムアップで計画を作り、積算もし、実験もし、開発もした上で通してくれという話になった。

高橋:大型望遠鏡を作るというのはまさにそ

うプロセスですよ。

海部:だけどそういうことが必要なのは物理天文の分野だけなのか。そうじゃないということなんですよ。それで僕は学術会議でこういう問題を議論しようと思って、いろいろ調べてみてやっぱりそのことに改めて気が付いた。つまりほかの分野でも大型計画するのは必要なんだ。やってないだけ。

それで僕らはアメリカでのやり方、ヨーロッパでのやり方、いろいろと調べたんですね。アメリカはまあそれほどでもないかもしれないけどヨーロッパのやり方は結構組織立ってて、いろんな国のエージェントとか、研究機関や分野の代表が集まった委員会があって、そこで出てきた計画を議論してリストを作るんですね。まあ30（個ほどのリスト）とか。で、僕が非常に感心したのが、その中に人文社会科学が入ってる。生命系はまあ当然予想できますが、人文社会科学が入ってることに僕は非常に感心したんですよ。

高橋:人文系もなんですか。

海部:確かにね、考えてみると生命科学だって人文社会科学だってそれぞれ細かい研究を勝手にやればいってもんじゃないで、要するにインフラってものが必要なわけ。今で言うと例えば情報インフラを情報学研究所がやるって言うんで、情報研の大型計画が進みだしてますね。生命系で言うならば、分子バンクみたいなもの、遺伝子とかですね。それからいろんな情報データベース、そういうものを整備してだれでも使えるようにするってのは非常に重要なことですけども、ほっとくとそんなことはだれもやらないんです。そうでしょ。みんな自分の研究の方、自分のプロジェクトをやる。だからそういう学術インフラっていうのはほっとくと全然進まない。で、そんな風だともう絶対立ち遅れていくわけですよ。アメリカなんかでは中心になる研究所があって、膨大な予算を取って作っていくわけ。そういうのが日本に欠けてる。

人文社会科学も実はそう。僕は人文社会科学で特に重要なのはデータベースだと思うんですね。これは日本学術会議向きじゃないですか。日本学術会議ってそういうものが全部入ってるわけ。第1部、第2部、第3部。第1部は人文社会ですよ。第2部が生命系で、第3部が理学工学系。今までは第3部の中の、またその一部だけでそういうのやって、実を言うとそれでは社会を納めさせられないんだよ。何で一部の分野だけそんなに大きなお金を使うのって、こういう批判が実は昔から影になく日向になくあったわけですね。だからその両方のことを考えるとね、これからも物理天文だけでっていうのは無理だし、そうするべきでない。正直言うと、こういうことを考えたのは日本では僕が最初だろうと思うんですよ。そういう議論を僕はそれまで聞いたことがない。

高橋: 大型計画が物理と天文だけのものだったというの、その中にいるとあまり意識しないですよ。でもどんな学問にも必要だと。

海部: それからもう1つ、文部科学省でもその頃困りはじめてね。1つには海外から「日本というのは科学についての将来計画はあるのか」と聞かれるわけよ。で、何も答えられない。それで学術会議にね、国際的に何か発信できないかっていう打診があった。それは非常に良いタイミングでありまして、ちょうどその方針を僕らが出したのとほぼ同時にそういうのがあって、それで学術会議としてもこれはちょっと捨てておけないねっというので、大型計画の分科会を作ったわけです。

だから学術界がサイエンティフィックにいい計画を出して、それを学術会議として精査する。文科省はそれを受けて、実施ができるような計画としてロードマップを作って、これに順次予算を付けていく。こういうのがこの間から何年間かかかって何とかできあがった。これで一番喜んだのは実は学術機関課なんです。文科省なんだよ。なぜかって、それがあると政治家の圧力をシャットアウトできる。つまり、学者の先生方が学問的

にこれはいいと言ってるものであればやりましょうと。だけどそうでなきゃ無理ですよと、こういうことが堂々と言えるわけね。マスタープランはもう国際的にオープンにしますから、それと関係ないのがいきなり出てきたら、今度は世界の批判を浴びるわけ。まあそういうシステムだから本当に喜んでくれて。

●マスタープランの立ち上げ

高橋: そういうマスタープランを作ろうということ、海部さんが提案したということですが、その時は海部さんはどうのお立場だったんですか？

海部: 1つは学術会議会員になって、第3部長という理学工学の部長になった。それで僕は第3部長だったから、直接僕がその分科会の責任者じゃまずいということで、幹事役をしました。それとその前からですけど、文部科学省の学術分科会っていう審議会がありますが、そこに研究環境基盤部会っていうのがあって、これは大学や共同利用機関のような研究所における研究の環境をどう整えていくかという、そこのメンバーをかなりやっただけです。まあそれは僕に向いてる話で、今年(2017年)の2月によく辞めたんで、ずいぶん長いんです。それでその両方にいたから、何かできるんじゃないかなって気がしたんですね。ただともかく日本学術会議が始まなきゃ始まんないじゃないですか。だから日本学術会議でその検討分科会っていうのを作ってもらって、そこで2007年に報告書を出しました。そこに今言ったようなことが書いてある。つまり透明性の高いプロセス、ボトムアップのプロセスが必要であると。もう1つは、全分野でそういう計画を立てていって、それを学術会議自身が審査をして社会に対して公表する、そういうマスタープランを作るべきであるというのがその時の方針です。

高橋: 検討の会は第1部、第2部、第3部、全部一緒なんですか。

海部: 全部一緒。そういう全体的なものについて

は学術会議は必ずそうです。

高橋: 日本国内では人文系とか生命系は、自分たちもこうこうやりたいって言い出したわけじゃなくて、海部さんが提案してということですか？

海部: まあそうだと思うね。僕以外がそういうことを言い出したわけじゃない。ただ非常に良かったのはね永宮正治さんって高エネルギー物理の方がいらっしゃるんですが、この人はJ-PARC っていうのを高エネルギー研と東海の原子力研究所を一緒にして作った人です。彼がやっぱりそういう問題には非常に熱心で、僕の言うことにも非常に賛成してくれて、彼とかなり二人三脚でやった。それから生物系にも非常にそういうことが分かる人がいて、その人はむしろ僕らの議論を聞いて「ものすごく勉強になった」と。「やっぱり生命系でもやらなきゃいけない」と言ってくれるようになってね。まあその分科会はそういう意味でなかなか良かったと僕は思うんだな。たまたまだと思うんだけどね、無理解で変なことを言う人はいなかった。

高橋: 天文とか物理はある意味まあ得してきたわけですよ。だから他の分野でも「自分たちも大きな計画をやらせろ」って言うのかと思ったらそうじゃないんですか？

海部: そもそもそういう発想がなかったわけです。自分たちの研究所、自分の大学、自分のグループの計画は出す。だけどみんなで協力して分野のためって発想はあんまりなかった。だけど、まあそういうことを考えてる人もいまして、例えば遺伝子データベースをもっと充実させるとかいう考えを出してる人はいたから、そういうニーズに適合してた。ただ彼らは大型計画として分野全体で議論して出していくという発想はなかったわけですね。まあ分野がでかくてお互いの足の引っ張り合いをしてるわけだね。その点で、マスタープランの提案というのは非常にアクセプトされたと僕は思いますね。特に人文社会の人は非常に喜んで、「そう言われればそれまでそうい

うこと、僕らは考えてこなかった」と。だからそういうことを議論するための分科会を第1部で立ち上げたりしてね、そういう影響はすごいあった。

高橋: 天文にいとそれが当たり前だと思っていましたけど、そうではないんですね。

海部: 物理や天文ででかい望遠鏡やなんかを作るのは、世の中ではそういうものだと思うてる。だけどじゃあ生命系とか人文社会系はどうすればいいのかと。そんなでかい装置必要ないでしょ。だからマスタープランでは2種類の大型計画を提案したのね。1つは大型施設計画。これは従来のもの。それからもう1つは大規模研究計画。これは大勢の人が集まってある期間、相当なお金を使ってその分野全体を強化していくような計画。例として挙げられるのは、やっぱりデータベースであるとかネットワークであるとか、それから基本的な材料の供給機関を作るとかね、そういう例を具体的に挙げてますよね。

高橋: 最初2007年に出したのは、マスタープランを作らしようという報告書で、具体的な計画はまだなかったんですか？

海部: それはその次の段階ね。だから結構時間かけてんのよ。2007年日本学術会議報告『基礎科学の大型計画の推進とあり方について』。これは僕が中心になってまとめたものです。そこで大型計画のマスタープランというものが必要だと書いてあるんですね。これは社会的にも国際的にもそういう将来計画というものを明確にするべきである。マスタープランが必要ではないかと。それから国民の理解を得られるように透明なシステムが必要だと。それからコミュニティを代表する学術会議が、国民的な計画として進めるべきであると。まあこういう基本的なこと。で、ここには「全学術分野における」ということが明記してあるんですね。この後に2008年だったかな、そのための分科会ができて、そこにマスタープランというか大型計画というものはどういう基準で選ぶのかとか、そういうことを書いた。『マス

タープラン2010』というのがそれを具体化した最初のもので、どういふ分野ごとに選ぶかとか、それから公募方法をどうするかとか、それから選ぶ時の評価の基準は何かとか、そういうことをザーッと議論して、それで大学や研究所に公募を出したわけですね。そしたら280くらい応募があったんじゃないかな。まあその中には箸にも棒にもかからないものももちろんいっぱいあったけど、その中で約40の計画を選んで、それを日本の大型計画として公表したのが2010年です。そういうのは全部もうウェブから取れます。

高橋: そんなにたくさん集まったんですね。

海部: だからある意味で言えば天文物理は損をするわけです。だって予算は限られてるんだから、今まで自分たちだけで使ってたのに他の分野も入ってきて競争しなきゃならない。だから僕はね、物理系から文句が出るんじゃないかと思ったの。でも少なくとも反対ってのは僕は聞かないね。いやあ文句言う人もいたかもしれないですよ。だけど表立っては出てこなかった。僕はもし文句言われたら、「ちゃんと競争してやるべきではないか」と。「これからも天文物理だけでなくとやれると思いますか?」と。そうはいかないでしょう。やっぱり社会に対して「日本の学術・基礎科学はこういうふうやっていくんだ」ということを堂々と言えるようなものでないと支持は得られない。これからますます予算は厳しくなるし、やっぱり他の分野だってそういうことは必要じゃないかと。そういう面では学術会議全体としてまあacceptedだと思いますね。ただし批判もあった。どういう批判かっていうと、「お前たちは先にやってて手を付けてずるい、それじゃ後出しじゃんけんだ」って。こういうことをねえ、学術会議の総会で言うんだよね。生命系の人ですよ。これまで自分たちは全く考えてこなかったじゃないの。それができるようになるわけですよ。

高橋: 海部さんの方から手を差し伸べたわけですよ。

よね。

海部: うん。まあそういう反応は実は結構強かった。ただね、面白いのはそういう反応が出始めたのは、マスタープランを作ってロードマップを作って、実際にいくつか通っちゃってからです。それでみんな大騒ぎになった。それまでね、マスタープランなんか作ったってどうせ学術会議にはお金は1銭もないわけだからね、言うだけだろうというふうに見てた人が結構多いと僕は思うんです。実際に人文系のもロードマップでかなり高く評価されたり、それから生物系でも予算が付いたりした。ロードマップに載ったものに実際に予算が付いた。現在いろんな形でロードマップに載った計画が全部で60くらいあるんだけど、そのうちもうやめたっていうものも約20以上ある。だけどほぼ20は何らかの形で予算が付いてるんですよ。正式に予算が付いたのが16かな。文科省のフロンティア（大規模学術フロンティア促進事業）っていうので予算が付いたり、それから大学から概算要求したのが付くとかね。そういう形で16計画が進み、他にも計画を変更したり縮小したりして進んでるのが4計画ある。全部で何だかんだ言ったって20計画。初期はね、一番初めのロードマップの時は、たまたま昔よりお金があってそれでいくつか通っちゃったんだよ。それで「わあ一大変だ」って。まあだいたいそういうもんなんだよ。それでずるいとか大変だとか、俺たちも出そうとか。

●文科省のお財布

高橋: 最初の頃は、それが本当に実現するとは皆さんあんまり思ってなかったと。

海部: それは実を言うと僕だって思ってなかった。1つその背景がありまして、僕がこれをどうしてもやりたかった大きな理由のもう1つは、ALMAは2004年に通るんですけど、その後大型計画が通らなくなっちゃったの。天文だけじゃなくて物理であれ何であれね、通らなくなっただけ

すよ。それはなぜかっていうと、文科省はその前は文部省と科学技術庁で、それが合併しろと言われた。で一緒になって文部科学省になった(2001年)。その時の騒ぎでそれまで文部省が大型計画用に使ってたお財布がね、どっかへなくなっちゃったんだよ。

高橋: お財布ってというのはどういうことですか？

海部: 要するにお役所ってというのは、何となくそういう予算のお財布っていうのがあるんだよ。これはこれ用ね、これはこれ用ねっていつて毎年それくらいはだいたい確保できるっていうのがないで、長期的な政策が立てられないじゃないですか。特別会計っていうんですが、特別会計ってのはいろんなものがあってぐじゃぐじゃになってよく見えないんだ。それがなくなってね。僕はずいぶん聞いてみたけど、いまだにはっきりした説明はない。だけどとにかくそうだった。

高橋: そんな突然消えてしまうことがあるんですか。

海部: それで僕はさっき言った文科省の研究環境基盤部会に出て行ってね、「大型計画はどうなったんですか」と。「その後、通すという計画が全然出てこないのはなぜなのか」と、僕はしつこく言ってたわけですね。その時にまな板上がりがかけてたのが実は重力波、KAGRAなんだよ。まあその頃はLCGTとってたんですね。それともう1つあったのがBファクトリーの高光度化。僕が見渡したところ、それ以外有力な計画はなかった。J-PARCの方は原子力研究所のお金を使ってもかくまあ結構走り出した。あれはうまくやったよな。それで重力波とBファクトリーの高光度化というのがあって、それがなかなか通らない。ALMAはとにかくもう走っててこれはこれでほっとしたわけだけど、僕はこれは放っておいたら大変だなあと思った。だから「文科省の方でお金を何とかしないと重力波はそのうちもう腐って落っこっちゃいますよ」って言ったわけですけども、僕は別に重力波だけを思ってたわけじゃ

ない。ともかくこのまま行って日本の大型計画が日本の学術からなくなってしまったら大変なことになると思ったもんね。まあそれもマスタープランの1つのきっかけなんですよ。学術会議がやっぱり発信しなきゃだめだろうと。やっぱり学術会議が大型計画というものをちゃんと推進すべきだと言って。

だけど、実は学術会議の中でもその議論を始めるについてはちょっと反対があったんだね。反対というか、まあ僕はもう本当に学術会議もここまで落ちてくるのかと思ったけど、僕に寄ってきた人がいるんだなあ。「どの計画を通したいんですか、ちょっと私に言ってください」って。何という奴だ。生物の有名な人だよ。そういう目で見られるわけです。「あいつはなんか自分のを通したいんだろう」って。まあ情けないと思ったけどね。だから学術会議はそういうレベルでとどまってる間はもうだめですよ。分野を超えてやっぱりシステムをちゃんと作っていく。そういうふうだからさあ、やっぱり物理や天文が文科省に行って陳情して通していくってやり方は、本当にもうだめだと僕は思ったよね。

●大規模学術フロンティア促進事業

海部: それでね、マスタープランの議論をだんだんしながらいよいよマスタープランを公募しようって話になった頃に、文科省の研究環境基盤部会で「学術会議でこういう動きがある。それを基礎にして、基盤部会で大型計画の議論ができないか。」っていう話をしたわけですね。そしたら担当部局の学術機関課がそれに乗ったんだ。それについては僕はねえ、理由があったと思うんですね。これはまあ、ああいうところですから決してあからさまには言わないけども、1つにはやっぱり今のやり方だとまずいと。つまり「何であの計画が通ったのか」、「何でこっちはじゃないのか」、「どうやって決めたんだ」というようなことが圧力としてどこに行くって文科省に行くわけです。それが

1つ.

それからもう1つ、お金がない。ところがね、2009年だったかな、文科省の話で重要なのが実はもう1つあるんです。2009年、その頃に麻生（太郎）さんが首相で、彼は「トップ30」という計画を出した。トップ30人のノーベル賞級の学者に100億円ずつ出す。覚えてないですか？ だから全部で3000億円ばらまく。これはさすがに批判を浴びたわけね。ノーベル賞学者にね、例えば小林誠さんに100億円やったらって、そうじゃないだろうと。もっとちゃんとした計画じゃないといけないし、ノーベル賞だから偉くて100億円使えば素晴らしい成果が出るって、そんなはずはない。まあそれはさすがにそういう反応がいっぱい出て学術会議も反論した。

高橋: 確かその時に民主党政権に変わったんですよ。

海部: それで結局どうなったかという、1つはFIRSTというプログラム。これはね、全部で30人の研究者に全部で1000億か。その30の研究者も個人じゃなくて、ちゃんと計画を出して、それに対して査定するっていう。それもバラマキって言えばバラマキで、結局これはどういう成果を上げたかっていうと、ほとんどどこかに消えちゃってるんですよ。けども実を言うとKEKのBファクトリーは、それにつながったんですよ。何とかその中に入ることができた。それからもう1つは、若手や女性研究者をサポートするっていう、300億円ってNEXT計画っていうのができて、これもまあそれなりに助かった人はいるでしょうけども、それでおしまいだ。だいたい尻切れトンボになるわけですね。その時限りの金だからね。

高橋: その時だけの話で。

海部: ところがですよ、ちょうど2010年のロードマップができるという話を僕がその研究環境基盤部会でやってた頃にこういうのが出てきて、文科省としてはタネになったわけです。流れ流れてね、そのうちの約300億円を、文科省が基礎科学

大型計画用に確保したんですよ。それが大規模学術フロンティア促進事業というもので、これが現在にまでつながってる。文科省の資料にも「新たに大規模学術フロンティア計画を創設して、世界が注目するプロジェクトについて我が国のロードマップ等に基づき」と。それで、「このロードマップはマスタープランを基礎とする」と書いてある。こういうことがそこで合意されたの。これはすごく大きな進展だったわけですね。

高橋: そこでマスタープランとロードマップがつながったわけですか。お金も付いて。

海部: 要するに研究機関課のなくなった大型のお金、言わば300億円という額ですけども、それがその麻生さんのをきっかけにして取り戻せたんだよ。それで、「ああこれでできる」と彼らは思った。だから文科省としては計画を選んだだけで全然実施できなければ、それはもう文句言われるだけで何にもならないでしょ。それは政策実施機関の重要どころだから。それでね、文科省もやろうって気になった。まあタイミング良かったんだよ。

高橋: 一時的なバラマキが定常的な予算になったということですか。それはすごいですよ。

海部: だからこの流れで実はいくつもロードマップの施設が通ってる。その一番最初がKAGRAですよ。それまでなかなか通らなかったんだけど、ロードマップができたんで、文科省は勢いづいてですね。正式なロードマップができる前にKAGRAにお金を付けた。このフロンティア事業のお金で。で、ロードマップが後追いでこれを承認する形になったんですね。それでまあKAGRAがようやく通りました。けどもね、残念ながら何年かのブランクが残念な結果につながったんですよ。僕はその間、宇宙線研の評価委員をやったから、「宇宙線研は重力波を本当にやるんですか、本当に計画に責任持ちはますか」って何度も確かめてるんです。まあ正直言っている文句も付けて、このままじゃみんなが納得しないんじゃない

かって、だけど僕には、天文関係だからっていうのはいつもあんまりないんです。まあ他にいい計画がなかったと僕は思うんですよ。Bファクターは先に通ってたし、KAGRAだけじゃなくて、それと同時に他のものもその余波でいくつも通りましたんで、それでさっき言った学術会議の大騒ぎになったのね。

高橋: それはなかなか偶然というか、いいタイミングだったんですね。

海部: だからこのロードマップとマスタープランってのは両輪なんだよ。どっちもないと困る。学術会議はどうしたってお金がないんだから、それをどこかが受けてくれなければ言い放しになるわけです。で、その文部科学省の研究機関課っていうのはまさにそういうことをやらなきゃいけない立場にある課として、そういう予算が確保できたんですね。少なくとも平均して年にまあ1個くらいは何とか通せますということになったわけです。ただしそのフロンティア事業で例えばすばるの運営費なんかも面倒見てるわけよ。だから300億円っていったって、毎年300億円のお金で新しいものができるわけじゃない。今までものの運営費、要するに大学共同利用機関なんかでやってる大型のものの運営費に加えて新しいものを作るから苦しい。苦しいんですけどね、それでもとにかくマスタープランが3年に1回更新され、ロードマップもそれを踏まえて更新するという形ができたわけ、その基本的な形がね。これまでやっぱり物理系が多いけれどもいろんな分野のものが通ってるんですね。人文社会科学でもロードマップで1件。これはまともに通って、日本文学の文献の資料データベースってのを今盛んに一生懸命やって、非常にいいと僕は思ってる。

●意識改革

海部: だからマスタープランの役割は、大型計画をそうやって科学的に評価する。これは科学的に意味があると。一方で、ロードマップは実施に耐

える計画であるかということの評価する。なぜかって概算要求するんだから。概算要求してみたら積算ができてないとかさ、どこの機関が中心なのか分からないとか、共同利用の体制ができてないとか、というのがあって、マスタープランの中には実はそういうのが結構ある。僕らから見ると甚だしいにもほどがあるっていう計画もマスタープランの中にはいっぱい入ってきちゃってるんですね。それはなぜかっていうと、分野ごとにうちも出すうちも出すってもう付け焼刃みたいなので、ちょっとあんだのと一緒にして100億円にして出そう、とかね。そういうのがいっぱい出てきたわけですよ。僕は当然それを予想してたし、そんなんじゃないだめだということを示さなきゃいけない。

天文なんかご存知のように、出てきた計画をみんなであわあ叩いて絞ってもっといいものにならないのかとか、ここはおかしいじゃないとか、そういう議論をする中で鍛えられた計画が最後に残ってるから、説得力があるわけですよ。それをやっていかないと本当にいい計画ができない。だからそういうことをほかの分野の人にもずいぶん言った。ロードマップの分科会に出た人も、違う分野の人が大勢いるわけでしょ。

高橋: ほかの分野でも、分野の中でちゃんと叩いてっていう意識は出てきたんですか？

海部: まあだんだんとね。いっぺんにはいきません。例えばそうだねえ、ちょっと難しい話なんだけど、さっき言った人文社会で唯一まともに走っている計画、2つあるんですけど1つはちょっと不十分な形…。それは国文学研究史料館(国文学研)、立川にある。ここが国文学のデータベースという提案を出して、まあ80億っていう予算を出したんだがそれはちょっと背伸びしすぎて、実際にはそんなに必要ないんですけど、それでも最初にまず何億という予算が付いてね。今までそんな予算付いたことないわけ。でね、これは考え次第で良かったと思うし、評価もされた。だけど

じゃあその実施体制はしっかりしてたかというところじゃないんだ。だから毎年のようにこういう体制は大丈夫ですかとものすごく注文付けた。特に重要だったのは、大学との協力と国際協力、この2つ。そういう視点があんまりなかったんだね。何か要するに自分の所の資料をデータベース化して保管してればいいという、それに近いものだったんですよ。だけどじゃあデータベースにするからにはだれが使うのかと。使い勝手をどうするのかと。だれが面倒見るのかと。そういうところからいちいちやり取りするわけですよ。共同利用なんだから大学の先生と協力してもらわなきゃ困る。じゃあ大学の先生にも委員会に入ってもらうとか、そういうことからやっていって国文研は変わりましたよ。非常に変わった。

高橋: ここでも共同利用という概念は重要なんですね。

海部: そうです。最初は中で文句が出てね、「何でそんなのに俺たちまでかり出されるんだ」、「何で他の大学の面倒まで見なきゃいけないんだ」と。大学共同利用なのに…。それがね、変わってきた。それで去年、中間評価っていうんで僕らが行って、訪問調査をやって、そういうのを受けたのもたぶん初めてだと思うんだけど、やっぱりみんな非常に良かったと言っているし、国文研が一生懸命対応して若い専門家を雇って来たりね。今まで考えられなかったようなこと。所長がやっぱり熱心だったね。それが良かった。最近皆さんがニュースで見たことあるかもしれないのは、そういう成果の1つとして極地研と一緒に古く文献にオーロラの文献があると。

高橋: ああ、ありましたね。

海部: それを極地研で調べてですね、そういうことが実際に起きたかどうかとか、太陽の活動はどうだったとか、それでどうも本物なんじゃないかっていうんで、結構新聞にいっぱい出たりしましたよ。まあだからそういうのだから、あそこの国文研に閉じたデータベースがありますって言う

ただじゃあ起きないことですね。いろんな人を巻き込んだから起きたわけで、そういうこともあったりして、極地研も喜んでよ。話題になってさ。

高橋: 中間評価というものもあるわけですか。

海部: はい、計画がちゃんと進んでるかどうかわかるっていう。でもそれまでは書類を出させて、呼んで来て20分話を聞いて質問して、それで評価。A.B.Cとあって。それじゃあだめだと。そういう中間評価は実地評価にしなければいけない。実際にそこへ行って、若い人も含めて話を聞いて、2日か3日かけてやるものだと。そういうふうにしなないと本当の評価にならないですよっていう、それも始まったんですよ。初めてそれで行ったのが神岡なんです。あそこでLCGTが進んでた。それからもう1つはカミオカンデの評価をやっってね。行った人は喜んでたね。「やっぱり現地見ないだめですねえ」って。つまりそういうことに慣れてない分野もあるから、そういう教育をしなくちゃいけない。そういうことってすごく重要です。だから他の分野にもそういう物理や天文が出してるものどちゃんと対抗できるようなものを出してもらわなきゃいけないわけよね。今のところどうしてもやっぱり物理系が強いから、物理系がたくさん出ちゃう。まあそれはそれでしょうがないじゃないですか。

高橋: ロードマップに載ったものが予算を取っていくということですが、ロードマップにはたくさん計画が載っているわけですよ？ その中でどれからやるかっていうのはどうやって決めるんですか？

海部: 文科省は、これくらいお金があるから1つやれそうだという時には、僕らかなり高い評価を付けたものから選ぶわけですが、僕らはその中で順位を1番2番3番とは付けられないわけですよ。それはまだ早いと僕は思ってる。それを僕らができるほどねえ、我々の世界はまだ成熟してない。だからむしろ客観的に「通しても絶対大丈夫で

す」ってものを置いて、例えば3つくらいそれがあったら、文科省がその中でじゃあこれなら何とかやれそうだなというのを実際に通すと。まあそういう意味で最後に文科省に判断のフリーダムを与える。ただし勝手にじゃない。それでいいかどうかはまた作業部会に出して、作業部会でまた評価ってのをやるんです。初期評価というのをやって、じゃあこれなら概算要求として財務省に出しましょう、ということをもう一度やるわけです。だからそういう意味で文科省としては、責任はこちに預けてるから楽なわけよ。財務省に出したって強く言えるわけですよ。「学術会議が全分野で推してるんですよ」と。「こういう作業部会でちゃんと太鼓判をもらいましたよ」と、こう言えるからうんと強いわけ。あと僕の望みはもうちょっとお金が増えることです。年に例えば2つくらい通せるようになるよね、もっと活気も出るし、いろんな分野にも弾みが出るし、本気になるし、と思うんだけどね。

●文科省について

海部: だけど文科省においてもそういういわゆる審議会行政っていうのは甚だよろしくないところがいっぱいありましてね。

高橋: 文科省に限らず審議会行政というのはよく批判されますよね。一応、有識者を外部から招いて審議してもらうという。

海部: 結局お手盛りなんだよ。そんなの、要するに官僚が考えた計画を通すためのものでしかないんだよ。昔は学術会議がある種ちゃんと学術政策を進める役割を果たしてましたけど、学術会議が縮小してからは、各省庁が自分の所に審議会を作った。科学技術・学術分科会ってそれでできたんだ。学術会議の代わりに、文科省がお手盛りをやるためにできた。やっぱり文科省は研究のことについてはサポートはするけれども分かっているわけじゃないし、政策も持っていないからね。文科省が政策を持つことは無理なんです。役人の担当

が2年か3年で変わっちゃうもん。持ちようがない。だから僕は学術会議が政策を持つべきだよ。

それからもう1つ僕が文科省にだいたい強く言ってきたのは、もっと研究者を活用しなきゃいけないと。ロードマップの作業部会っていうのは年に20回もやってますからもうそれはすごい労力を使ってますけど、みんなそれは良しとしてと思う。ただね、こういうんじゃ限界があってもっと文科省、行政と研究側が一緒になって作業するような、そういうボディを作らないといけないんじゃないかと。学術会議はそれをサポートする非常に重要な機関でね、それから大学共同利用機関についてももっと文科省とまともに協力するようなことを考えるべきではないか。そう言う、みんな「何で文科省と…」って言う。文科省はなんか敬遠したい、お金はもらうけど。まあそういう雰囲気はまだありますけど、僕はそうじゃないと思う。それぞれの研究所や大学のことだけを考えて、まあそうやって文科省からとにかく何とかしてお金だけもらってればいいかもしれないけど、少なくとも大学共同利用機関はそれじゃあ責任を果たせないと思う。

高橋: そういう議論の時に、文科省の方が何かアイデアを出すということはあるんですか？

海部: 文科省の側からというかね、文科省の意見はある。どんな意見かという、これだとやれる、これだとやりにくい、こういうふうだとやりやすいっていうのは当然あるわけだよ。財務省なんかとやんなきゃいけないわけでしょ。だからちゃんと理屈が立たないといけないわけですよ。そして文書としてちゃんと書けること。これに関してはね、僕は担当課長とか係長とかずいぶん会ったけども、この前まで4年くらいやってくれた課長補佐の人は非常に良い人で、僕とはツーカーでやれた。僕はやっぱり研究者だから、割と勝手なことをいろいろ出すでしょ。すると彼は「文科省としてはちょっとこのところはこうしたい」ってはっきり言う人でね。その辺は非常に

良かったですよ。彼も「ずいぶん勉強しました」って言ってたし、だけどそうやってせっかく勉強した人がどっか全然関係ないところへ行っちゃうんだよなあ。まあそのうち戻ってくるんじゃないかと思うんだけど、課長とかでね。

高橋: じゃあ新しく来る人も全然違うところから来るんですか？

海部: だいたいね。でもまあさすがにねえ、全くの畑違いではない。まあできるだけ研究ということである程度経験がある人を回そうとはするんだけどね。まあしかし彼らはねえ、一生懸命やってるし、僕は基本的には評価してるんです。だからこういうことをやるについても、例えば報告書を最後にまとめるのは、それは彼らがやっぱり基本的な報告書の案を作りますからね。僕はそれに散々何かコメントを入れるけれど。

僕は学術会議でマスタープランをやって来たから非常に良かったんですよ。つまりそれを踏まえてロードマップをやるんだから、ロードマップのストラクチャーってのは、マスタープランの科学的な判断を基準にしたものに文科省的な色合いを付け加えれば基本はできるでしょ。だからそういう意味じゃ僕もやりやすかったし文科省もやりやすかったと思うよ。学術会議のマスタープランは基本的に完全に僕らが作ったものじゃないですか、それを基にしてるわけだからね。だからそれは文科省としても学術会議が全体としてエンドースしたものだから、ということで受け入れやすい。僕個人の提案じゃないから。で、あとはそれを実際に実施していく上でさっき言った評価をどうやるかとか、もっとしっかりした審査会にしましょうとか、こんなじゃ時間が足りないから3日かけようとか、そういう話はまあどンドンするわけね。まあそういう意味では割とうまくいったと思うなあ。

高橋: よく省益とか言ったりしますが、官僚の人たちのマインドみたいなものって理解できてきましたか？

海部: うん、まあそうですね、答えはイエスだよな。文科省には我々に関係する局が3つあるんですけど、学術振興局というのが言わば学術を扱ってるわけね。その中の研究機関課ってのが特に研究所、大学の研究そのものを担当していて、僕がメンバーだった研究環境基盤部会っていう審議会がその場になるわけですね。彼らは基本的に学術をどう進めるかという立場にある。これはもう間違いなくそうなんです。ただいかにせんお金がないということと、財務省からもううるさいことをいっぱいいわれる。うっかりしてるともうすぐに金を取られるという中で、どうすれば研究のためのお金を何とか確保できるかって必死なんです。

ただ一方で、そこにもう1つどうしても絡むのが、高等局という大学を扱うところですね。そこは国立大学だけじゃなくてまあ私立大学なんかもある意味でのコントロール下にあるわけですね。だからそれはなかなか膨大なものが対象で、かつ彼らは直接政権の攻撃を受けるところです。つまり今、どういうわけだかしらんけど国立大学って政府の目の敵でしょ。運営交付金を減らすと、そうすると天文台も国立大学の仲間だから一緒に減らされるわけですけど、とにかく国立大学の力を削ぎたいとしか思えんなあ、自民党政権は。なぜかっていうと、うるさいからなんだ、簡単にいうと。大学はすぐ批判する、うるさい。分かるでしょう。自民党にはそういう体質がずっとありましてね、批判する奴らはけしからんと、予算減らせと。彼らは国の税金を自分たちのものだと思ってる。根本的に間違ってるでしょ。国と政権とを同じだと思ってるわけですね。そういう中で学術会議もいじめられてきた。産業界も口を出さばっかりで金を出さず。非常に苦しい立場に置かれてますね。高等局はそれに対してどれくらい有効に反応してるかっていうと、それがなかなかね、僕から見ると歯がゆい。まあ大学も歯がゆいが、とにかく僕は文科省は気の毒だと思ってるん

だよ。弱小省庁なんですよ。財務省なんかから言わせれば、あんなの三流省庁だ。昔からそうらしいよ。だから力がないんですね。新しいことをやるにも、新しいものを取ってくるってことがなかなかできない。だから小手先のこまごまちょこちょこした政策で何とかせざるを得ないというね、残念だけど僕はそういう状況にあると思って。その中で必死になってるのがあの人たちよ。

高橋: 文科省に力がないっていうのは、さっきもそういう話が出ましたが、日本の歴史的な経緯なんですかね。

海部: そうでしょうね。まあ要するに学校教育に政府が出してる金、科学研究に出してる金、GDP比で見ると日本はOECD諸国の中で最下位よ。ずうっと。もうそれは伝統だよ。不思議でしょう。それでも日本結構がんばってるじゃんっていうのが僕の感想。それは現場の人ががんばってるから。だけど今やってるのはそれをますます抑え込もうとしてる。

高橋: 財務省とは関わることはあったんですか？

海部: 直接はないですね。やっぱり混乱するもの。文科省が何とかこうやって金を取ろうと思ってるところでだれか行って引掻き回したら困るでしょ。それはまあ僕はよく分かる。

高橋: 文科省が財務省に何か説明に行くとか、そういう時には同行したりはしないんですか？

海部: しない。例えば非常に巨大な原子力とかね、まあ国の政策として何か打ち出してさ、そういうような場合はそういうこともあるかもしれませんが、天文とかそういうのは全然ないよ。僕らがやることは、文科省が財務省に対して強い主張ができるようにしてあげることですよ。

大事なことがもう1つ、日本学術会議は、かつては文科省の統括責任下にあったわけですね。だけど今は内閣府の下にある。だから日本学術会議は省庁を超えうる存在なんですよ。それはなぜかっていうと、日本学術会議法っていう法律があって、その先頭の方に「日本学術会議は独立し

て科学学術に関する重要事項を審議し、政府に答申することができる。」とはっきり書いてある。「独立して」というところが重要なんですよ。だから内閣府に何を言われようが、直接政府にものを言えるんです。そのことは政府も認めざるを得ないから、例えば総合科学技術会議があるじゃない。あれは首相の諮問機関でね、科学技術のことを議論するっていうことになってるんだけど、ここでは学術会議会長が必ずメンバーになってるんですよ。ですから学術会議はその気になればもっといろんな役割を果たせるわけです。だけど兵糧攻めにあってるわけよ。要するに予算をどんどん減らされてる。事務局のメンバーも極めて貧弱。

●日本学術会議の弱体化

高橋: 今の予算の話もそうですけど、学術会議は昔はもっと権威があったのが、一時期力を失ったという話を聞きます。それはいつ頃の話ですか？

海部: 一時期というか、今も力を失ったままだけどね。1970年代の前半くらいまでは、学術会議はそれなりの役割を果たしてたんだ。例えば野辺山の勧告が総会へ出たのも1970年代なんですよ。だけどね、その頃からだと思ふな、いろんな攻撃があって…。

高橋: やっぱり何か批判をされると嫌われるということなんですか？

海部: そう、はっきりしてるよそれは。1つはやっぱり原子力政策で非常に対立があったわけですね。具体的にいうと、日本政府は原子力発電をやりたい。日本は当然原子力っていうとアレルギーあるけど、中曽根(康弘)・正力(松太郎)という人たちが中心になってやると。それで日本学術会議は意見を聞かれたわけです。その時は湯川(秀樹)・朝永(振一郎)が中心だったんだけど、「原子力の平和利用自体には反対しない」と。しかしながらやはりやるなら日本が原子力に関する研究力をつけないと対応できないから、まずは研究炉、実習炉を作れと。というのはその頃

はまだ1950年代だから、要するに仁科（芳雄）さんが作った加速器なんか捨てられちゃってる時代でしょ。

高橋: GHQにサイクロトロンを捨てられたという話がありますね。

海部: だからそういうことが禁止されてたわけですよ。だけどやっぱり日本として力をつけなければならぬという話をしたんですが、中曽根・正力はアメリカから買うっていうのにもう決めてたんです。

高橋: 自分たちで研究して開発するのではなくて、アメリカから買って来るといことですね。

海部: 面白いよ、そういう座談会の記事があるんだよな。中曽根・湯川、朝永さんもいたかな。そういう議論になったら中曽根は最後に何て言ったかっていうと、「要するに研究者は金が欲しいだけだ」と言い放ったよ。だからそういう目でしか見てない。日本にとってそういう科学的な裏付けがないと、原子力みたいなものは非常に危ない面もあるんだというふうな認識はほとんどないし、それから科学者の力というものが日本を動かしていく上で必要だという認識もないんで、まあ典型的な東大法学部の発想だ。まあさっき言った、科学に対する軽視っていうのは1つにはそれはあるね。結局東大っていうのは明治維新の時に土台ができて、国のための人材養成機関として位置付けられた。特に東大法学部は政治家・官僚を作るためのもの。だから東大法学部出身者は、俺たちが全部動かしてると、こういう意識だから。だから科学なんてものは全然下っ端だと思ってたわけですね。そういうのが綿々と続いてきてるといのはあるよね。とにかく批判する奴らは邪魔だと、抑え込もうという意識はもうずうっとあるんですよ。実は今に始まったことじゃない。

高橋: 逆に言うと、研究者たちのそういう批判っていうのは世間に対して影響力があると。

海部: それはありますよ。特に学生に対しては。そのことと、あと学術会議叩きが一気に表面化し

たのはね、不祥事があったからなんですよ。昔は学術会議の会員は選挙で決めていて、学術会議の会員っていうのは結構な名誉職なので、分野によっては熾烈な争いがあったんですね。その頃は学会から学術会議会員候補を提案するっていうシステムになってて、各学会員が投票権を持つんです。日本天文学会だって学術会議の選挙をやって、僕が若い頃はまだ投票できた。ところがですね、収賄とか国政選挙並みのバカげたことが医学分野であった。それが叩かれたんですよ。僕らから見ると医学なんてのは学術会議の中の保守中の保守でさ、戦前体質がもろだったのね。だからそれを的にして学術会議全体を攻撃したわけです。これはもういいチャンスだっていうんでね。あれはすごく大きかったと思うな。僕はそれを見てた。

高橋: それはいつ頃ですか？

海部: 70年代ですから、僕はもう助手になってたわけだな。これは酷いことになってきたなど思った。とにかく原子力についてはもう学術会議はうるさいからっていうんで、しっかりした科学者たちをみんな排除しちゃったから。それが日本の原子力の体制の貧困さを生み出した1つの大きな原因と思うね。最初、湯川さんが原子力委員会の委員になったんだな。だけど物理の人が、あんなのの肩を持つのかっていうんで結構批判したそうですね。僕の感覚からするとそれは違うと思うんだけど。だけど湯川さんは原子力委員を1年で辞めちゃうんですよ。サイエンスと全く違うレベルの話になってしまってもうどうしようもないんで、辞めちゃったんです。それ以来やっぱり学術会議と原子力政策っていうのはもう切れたって感じでね。まあその後の平和問題にせよ、ベトナム戦争とか何とかあると学術会議からやっぱり批判が出る。そういう批判をするのはけしからんっていうのが基本なんだ。僕はそれをよく知ってる。ある政治家がはっきりそう言った。「大学はけしからん。言うことを聞かん。」

高橋: アメリカとかはそうじゃないんですか？

海部: アメリカでもね、そういうことはまあなくはないと思うんです。けどももっとサイエンスが尊重されてるわけ。サイエンスというものは国の基本である、国のストラクチャーを支えるものであるという認識があるわけ。もちろんアメリカの天文の仲間に聞くと文句言うよ、政府はちっとも分かつたらんとか、科学と技術の区別も知らんとか、散々文句言うし、トランプが出てくると予算も減ったりするし、そういう文句はいっぱい言ってますよ。けどやっぱり基本的な理解度はずいぶん違うね。海外の場合で見ると、アメリカもかなりそうなんだけど、大型計画の分配なんかは研究者にかなり権限が与えられるケースが多いです。ドイツもそうだよ。例えばマックスプランク(研究所)とかね、ああいうところはもちろん全体の予算は査定するけれど、ボンと出したら後は科学者に任せる。マックスプランクっていうのは巨大なシステムですから、80いくつの研究所、そこをどう運営するか、これはもう科学者・研究者の責任。そういう自主性っていうのを非常に重んじているわけです。

日本の場合それはそれが攻撃的になってるでしょ。まあはっきり言って大学の先生も自治ということをちょっと履き違えてると僕は思うよ。自分たちが何でも決めるんだと。他が意見を出すのは一切けしからんと。そういう姿勢がずっと貫かれてるし、今でも結構そうじゃないだろうか。そうすると保守的になるのは決まってるじゃない。そこを突かれた。大学は衰えてると、けしからんと。だから上からリードしてやるんだというんで、学会の選挙をやめさせ、教授会の権限をはぎ取り、それからだんだんと学長だって上から任命するように本当はしたい。さすがにそこまではできない。まあしたらめっちゃくちゃになるけどね。そういう意味での政治家の学問・教育への理解度は残念ですけどやっぱり日本では甚だ低い。

それはそういう政治家を選ぶ国民が悪いって言えばそういうことになる。ここはいくら議論してもしょうがないんで、我々は我々の立場でできることをやるしかない。逆に言うと日本の学者もじゃあ自分たちで本当に予算が配分できる力があるのかっていうと、僕はやっぱり正直言うと疑問に思ってるわけです。だからさっきも言ったように学会会議ではマスタープランの順位もちゃんとつけてはどうかという議論は当然あったけど、僕はそれには反対したんです。

(第13回に続く)

謝辞: 本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

訂正: 2月号の第11回: 台長時代(後編)記事の中で145ページの「ジャック・コーニー」は「リカルド・ジャッコニー」、149ページの「趙(世)」は「趙(世衡)」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

A Long Interview with Prof. Norio Kaifu [12]

Keitaro TAKAHASHI

Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami, Chuo-ku,
Kumamoto, Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the twelfth article of the series of a long interview with Prof. Norio Kaifu. In his later years, as a member of the Science Council of Japan, he worked on the system design to promote large-scale plans for the entire academic field in Japan. As a result, the Master Plan was launched and this ensured the transparency and fairness of the process of large-scale research projects. Also, this was an important step towards a healthier and more effective academic administration.